

特集

眼瞼下垂の外科的治療

序 論

後藤 浩*

今回は眼瞼下垂に対する外科的治療に特化した特集である。

近年の高齢化社会への急速な移行も相俟って、眼瞼下垂に対する治療のニーズは高まりつつある。一方、最近は眼科の学会でもインストラクションコース等で外科的治療の手技やコツが伝授される機会も増えてきた。かつては形成外科医のほかは、ごく限られた眼科医によって行われることの多かった眼瞼下垂の手術も、最近は治療にチャレンジする眼科医が増えつつあるようで、多くの症例で視機能の改善と整容的な満足が得られるようになってきていることは喜ばしい限りである。ただし、眼瞼下垂はその原因や病態も多岐にわたるので、まずは正確な診断が求められることは言うまでもない。症例の多くは加齢に伴う下垂であり、次いでコンタクトレンズの長期装用による下垂と考えられるが、まずは重症筋無力症や動眼神経麻痺、Horner 症候群、さらには涙腺腫瘍などの可能性を考慮し、しっかりと鑑別を行ったうえで治療に臨む必要がある。また、加齢に伴う眼瞼皮膚の弛緩が主因である場合には、挙筋腱膜や Müller 筋に手を加える必要はないことも多いので、極めて単純な作業ではあるが、その見極めも大切であ

る。

眼瞼皮膚弛緩症を含め、眼瞼下垂の外科的治療についてはバリエーションがあり、それぞれ一長一短があることを術者は十分に理解したうえで、最善の結果が得られるように術式を選択し、手術に臨むべきである。また、以前から眼瞼下垂の治療は視野の改善のみならず、自律神経系にまつわる諸症状の改善をもたらすことが知られており、しばしば経験されるところでもあるが、その効果がマスキ等で過剰に取り上げられた時期があった。一方、眼科医が眼瞼下垂の外科的治療に関わる以上、視機能への影響については常に関心を持たねばならない。正しく治療された場合にはさまざまな視機能の向上がみられることが明らかにされており、本特集でも詳細な検討の結果が紹介されている。

眼瞼下垂手術のエキスパートにより、各術式の適応から手術の実際について大変わかりやすく解説していただいた本特集は、特にこれから眼瞼下垂の手術を始めようと考えている眼科医にとっては座右の書として長らく活用されることをオススメしたい。

*Hiroshi GOTO 東京医科大学医学部眼科学分野